



お祭 泥棒と
夏祭り

秋乃

——ああそうか、今日は夏祭りだ。

どこからか拙いお囃子の音頭が聞こえてきて、私はゆっくりと傾いでいた顔を上げる。

寝かしつけるつもりが、いつの間にか自分も寝てしまっていたらしい。膝の上に乗った癖のないお下げ髪が——来年小学校に上がる愛娘が、すやすやと気持ちのいい寝息を立てている。

鬼灯^{ほおずき}の実みみたいな西日は垣根も庭も一息に飛び越えて、私と娘をべっこう色に染めながら、遠く見える黒々とした丘陵の谷間へと徐々に消えゆこうとしていた。

昔ながらの日本家屋は、隣接する部屋の戸を全て開け放てば、広々とした空間と涼しい風の通り道があつという間に出来上がる。夏は盛りでも、季語にもなっている草の香りと金魚鉢をひっくり返したような形の風鈴、それにコップ一杯の麦茶があれば、コンクリートの密林から抜け出してきた都会人には随分と涼しく感じられる。

聞こえてきて、まだ残っていたんだ……とぼんやり思った豆腐屋さんのラッパに、お囃子の笛太鼓、蟬の声、風に揺れる風鈴の澄んだ音色とが重なって、物悲しい夕暮れ時を田舎特有のゆったりとした時間の流れが彩っていた。

ここ数年、子育てと仕事の両立とで何かと余裕がなく、実家の両親を顧みることはあまりなかった。現に、娘が生まれてからは一度も帰っていない。

例年なら盆のこの時期に手が空くことは滅多にないのだが、珍しく次の仕事まで数日の間が空いたのをいいことに、旦那とようやく手の掛からなくなってきた娘を連れて、短いお盆休みにこうして帰省してきたのだ。

お昼過ぎに着いて、旦那は「いい機会だから」と、今は私の両親と歩いて買い出しに出ている。おねむの娘と私は、田畑と山々に囲まれた田舎のスローライフを満喫しながら、ゆったりまったりお留守番というわけだ。

母は久しぶりに帰省した一人娘と孫の顔を見た途端に五歳は若返ったようで、「晩ご飯はお祝いね！」などと何がめでたいのか分からないが、勢いに気圧されて及び腰の男勢を引き連れて、うきうきと買い物へと繰り出したのだった。

「まだ誰も帰ってきていないのね……」

家の中が閑散としているからか、夕暮れの家の外からは、鳥や獣や虫の息づかいがひしひしと感じられる。久しく忘れていた、大小様々な生き物たちの呼吸。命。

どれくらい寝ていたのだろう。確か見送った時はまだ日も高かったはずだ、と座敷の赤茶けて年季の入った掛け時計を見れば、長針と短針がほぼ真下を向いていた。冬なら外はとっくに真っ暗闇だろう。

いつもの調子で夕食の仕度をしなきやと立ち上がりかけ、ああそうだ、実家に帰っているんだったと思い出して、一人苦笑いのまま僅かに浮かせかけた腰を落ち着ける。田舎は……というより生まれ育った家はやはり落ち着くし、なにより主婦にとって家事をしなくていいのは非常に楽だ。

「ママ……」

「あ、起こしちゃったか」

もぞもぞと膝に乗った三つ編みが身をよじり、まだ眠たげな薄茶色の眼が私を見つめ返してきた

。楓。

秋の山々を彩る紅葉のように、人の心に鮮やかに残る女性に……とロマンチストな旦那が名づけた、私の愛娘。

「なにかきこえるー……」

そう言って目元を擦った方とは反対の、赤チンを塗った傷口の生々しい右腕を持ち上げ、庭の方を指差す。はしゃいでいて、さっきその庭で転んだのだ。女の子のくせに少々腕白なところがあるのは……多分私側の血だろう。

「うん。今日はお祭りの日なんだよ」

「おまつり！」

その単語を聞くや否や、眠たげな目元はどこへやら。ぱっと向日葵のように満面の笑顔で膝の上から飛び起きた風の子は、どたどたと畳を踏み鳴らし、大急ぎで色あせた檜の縁側まで走っていくと、顔の横に両手を当て、さっきから小さく聞こえていたお囃子の音を聞き分けようと、目をつぶって耳を澄ませた。

幼稚園で聞きかじってから、お祭りと聞くとずっとこんな調子なのだ。娘の相変わらずの祭好きに小さく笑いながら私も縁側へと歩いて行って、目を閉じて身を乗り出し、一音たりとも聞き逃すまいとしている娘の脇に腰を下ろす。

「まだ聞こえる？」

娘に尋ねると、

「しーっ！ おまつりにげちゃう！」

と、怒られてしまった。思わずくっくつと娘に見られないように笑いを噛み殺す。どうやらお祭りが好きでも、どんなものがお祭なのかはよく分かっていないらしい。まだ娘を実際のお祭りに連れていったことはないのだ。

（あっちのお祭りは人混みが危ないからねー）

私はそんな娘を微笑ましく思いつつ、無意識のうちに縁側の前においてあった金バケツから、昨日の雨で溜まったらしい雨水をひしゃくで掬い、夏の強い陽射しで乾燥した庭へと水を打つ。丁度よくひしゃくも置いてあったことから、両親のどちらかが故意に置いた物で、彼らも時折こうして水を撒いているのだろう。

ひよんな所に両親との共通点を見た気がして、少しだけ嬉しくなった。

「おまつりにげちゃった……」

しばらくそうして水を撒いていると、心底残念そうな顔の娘が隣に腰を下ろした。その姿があまりに可愛くて、今度こそ私は吹き出してしまったのだった。

どうやらお囃子が聞こえなくなったらしい。昔と変わっていないなら、子供会の小さな囃し手たちは町内をぐるりと一周して近所の神社に戻ってくるはずだ。そこで合図の打ち上げ花火（『段雷』というらしい）の音が聞こえてくれば、大人の舞い手による虎舞、巫女神楽など古くから伝わる神事が順次行われる。

「もうかえってこないかな……かえでがいいこにしてなきゃだめかな……」

小さな子供なりに本気で心配しているらしい。ペットが逃げ出したように落ち込む楓の頭を優しく撫でながら、私は「大丈夫」と娘に断言する。

「お祭りはちゃーんと待っててくれるから。後で一緒に会いに行こうね」

「ほんとう!？」

「うん、本当。約束する」

「やったー! やくそく。ね!」

この笑顔を見ているだけで、ああ、産んでよかったなとつくづく思う。

苦労はあった。苦難もあった。けれど、この子は今こうして笑ってここにいる。それだけで私の人生は間違っていないと断言できるのだ。

そんな柄にもない感傷に浸る私に、唐突に不意打ちが襲ってきた。

「パパもいっしょ?」

「え。う、うーん……」

躊躇う私。途端に泣きそうな顔になる一人娘。

「いっしょじゃないの……?」

遡ること数時間前。私は旦那と喧嘩しているのだった。

それも久々に大喧嘩。

旦那の両親は、旦那が親のありがたみなんてものを知る前のまだ小さな頃に他界している。その後は叔母さん夫婦に引き取られて、幼いながら自分がここでは異物であると感じていたらしい旦那は、なるべく角を立てず、極力目立たないように、と後ろめたさの沼地にどっぷりと浸かって幼少時代を生きてきたのだという。

だからこそことあるごとに「親御さんには連絡したのか」と口うるさく言うし、楓が生まれてからは「俺がもっと働くから、仕事を辞めて家にいてくれないか」と、よく言われる。

その度に辞める気はないからと突っ撥ねて、そのまま喧嘩に突入することもしばしばだ。

今日も今日とて帰ってくるなり両親の前で喧嘩を始めてしまった。原因もいつものこと。専業主婦になれと言う旦那に、好きな仕事だから辞めたくないと言う私。なにも実家に帰省してまで喧嘩することなどないだろうに、と両親は呆れていたが、どこか楽しそうでもあった。……止めてくれてもいいのに。

もしかして、そんな私達を見かねて半ば強引に旦那を買い物に連れて行ったのかもしれない。昔からそういうことには聡い人なのだ、母は。

(気を遣わせちゃったかな)

そんなことを思っていると、

「わっ!」

「うわあーっ!」

いきなり激しい稲光と共に、耳をつんざかんばかりの雷鳴が辺りに轟いた。

見上げれば、いつの間にか怪しい暗雲が空の半分程までもくもくと立ちこめ、夕焼けのキャンパスを覆い隠そうとしている。

「ごろごろさまだーっ!」

さっきまでの泣きそうだった顔など、パンの顔をした正義の味方のようにさっさと取り替えたのか、楓はキラキラした眼差しで時々白い光を放つ空に思いきり両手を伸ばした。

雷は怖くないらしい。そんな所は小さい頃の私そっくりだ。……それもおへそを取られると教えられるまでかもしれないが。

「これはお祭り泥棒が来るかもしれないね」

ふと、そんな言葉が私の口をついて出た。

「？ オマツリドロボウ？」

「そ。お祭り泥棒」

娘に代わって今にも泣き出しそうになってきた空。この調子では打ち水はもう意味がないだろう、とひしゃくをバケツの中に戻した途端、バラバラと大粒の雨が一気に目の前の風景を滲ませた。

屋根を叩く音、庭の小さな池を叩く音、金バケツを叩く音。太鼓の演奏会のような雨の音は、私の意識を遥か昔の記憶の中に引き込んでいった。懐かしい景色が瞼の裏にありありと浮かんでいく。

「まだママが小さかった頃はね——」

ママがまだ小さかった頃はね、お祭り泥棒がいたんだよ。

うん、そう。毎年この夏祭りの日にだけやってくる泥棒さん。でも、会えるかどうかはその日にならないと分からないの。子供はみんな、毎年この日は「お祭り泥棒今年は来るかな？」って楽しみにしてるんだよ。

『なんでドロボウさんにあえるのがたのしみなの？』

ん。それはね、ドロボウさんが来るとお祭りが盗まれちゃうから。

『えーっ！？ ドロボウさんがおまつりってっちゃうの？』

ママがまだママじゃなかった頃……そうだね、楓くらい小さかった頃のお話なんだけど……。

『かえでちいさくないもん！』

ふふ、そうだね。楓はもうお姉ちゃんだもんね。

あの日、ママは初めて浴衣を着て、初めてお祭りに行ったんだよ。薄い紫に真っ赤な金魚が泳いでるの。そうそう！ 丁度この風鈴みたいな模様でね、可愛かったなあ。

『ゆかた？ ゆかたってなーに？』

んー、さっきおじいちゃんが着てた服……みたいなもの、かな。お祭りの時にしか着ちゃいけないの。

『おおー！ 〴〵せいふく、ー？』

そう！ 浴衣はお祭りの制服なのです！ 楓はよく知ってるね。

『えへへ！』

でね、その制服を着たママは、ママのママ……つまり楓のおばあちゃんに手を引かれて、お祭りデビューしたの。

『おまつりにあえた？』

うん、会えたよ。真っ暗な神社の境内に赤や黄色の明かりがぼやーって浮かんでてね、その明かりごとに色んな出店がお客さんを呼んでるの。射的、輪投げ、たこ焼きに焼きそばにチョコバナナ。それになんと言ってもわたあめ！ 甘くて美味しいの。

『おまつり……すごそう？』

ちっちっち、楓は分かってないなー。〴〵凄そう、じゃなくて〴〵凄いなんだよ。

『ほー！ ほー！』

でもね、ママ、そこでおばあちゃんとはぐれちゃったの。とっても涼しそうな音が聞こえてきたから、絶対離さないでねって言われてたのに、おばあちゃんの手を思わず離して、音のするほうに走って行っちゃった。そこは風鈴を売ってる屋台でね、楓の頭の上で鳴ってる、ほら、それみたいな風鈴がいっぱいあって……、

『これ？』

そう、それ。風が吹くたびに全部が一斉にリーンリーンって鳴るの。

『リンリンカー』

お、いいね。リンリンかあ。

しばらくそうしてリンリンの音を聞いていたらね、お店のおじさんが「おじょうちゃん、お母さ

んは？」って聞いてきたの。

ママがね、右を向いても左を向いても、後ろを向いても、いつの間にかはぐれちゃっておばあちゃんはいないのね。まわりは小さかったママの二人分くらいの身長の大人数ばかりで、上を向かないとママからは歩く人の腰くらいしか見えなかったの。

それで、だんだん心細くなった私はお店の前で泣き出しちゃった。そりゃあもうえーんえーんって大声で。

『かなしい？』

楓はママが泣いたら悲しい？

『うん。かえでかなしい』

……楓は優しいね。でも大丈夫、おじさんは急に泣き出しちゃったママにびっくりしちゃったんだろうね。「おじょうちゃん迷子かい？」って聞くの。そしたらママ、なんて答えたと思う？

『なんていったの？』

泣きながら、「私のママが迷子です」って

『あはは！ おばあちゃんがまいご？』

うん、迷子。本当は私が勝手にいなくなっただけなのにね。でもその時は、ママのママが迷子になったんだと思ったの。

『おばあちゃんまいごだー！』

おばあちゃんが帰ってきたら内緒だよ？ しー。分かった？

『しー。わかったー！』

約束ね。

『うん！ やくそくげんまん！』

でね、お店の前でママがずっと泣いてるからおじさんは困っちゃって、売り物の風鈴——リンリンを一つ取ると「ほら、これあげるから」ってくれたの。それが、これ。

『これ？』

そう、その楓の頭の上で鳴ってるのが、ママが貰った風鈴。まだ現役ばりばり。丈夫だねー。

『ねー』

本当に分かって言ってるんだか……でもね、昔のママにはリンリンを貰ったことよりも、おばあちゃんとはぐれたことの方が大事件だったの。

あんまり泣き止まないもんだから、おじさん益々慌てちゃって、そのうち「ちょっと待ってな！」って言っておばあちゃんを探しに飛び出していっちゃった。ふふふ。……おじさんは、おばあちゃんの顔も名前も知らないのね。

「まいごのおばあちゃんみつかったの？」

うん。でもね、その前に不思議なことがあったの。

『ふしぎなことー？』

そう、とっっても不思議なこと。

ママはね……お祭り泥棒さんに会ったの——。

「どうしたの？」

風鈴の音色のようにひゅうと澄んだ声が、唐突に幼い私の耳に届いた。

「どこか痛いなの？」

膝を抱えうずくまって泣いていた私は、その声に誘われるまま目を覆う両の手の枷を外し、潤む視界で声のする方を見上げた。

「え……？」

目に飛び込んできたのは、本当に自分と同じ赤い血が通っているかどうかすら怪しい、色白というには白すぎる、石畳を踏み締める真っ白な裸足の爪先だった。

涙をすすりながらも好奇心がむくむくと顔を出した私は、赤く腫らした双眸で声の主をそっと窺うように首をもたげた。

市松模様のよれよれの甚平。傷一つない、透き通るような肌。伸ばし放題のぼさぼさの髪の毛。そのどれもが強烈に私の視線に刻まれていったが、幼い私はそのどれよりも、鼻まで届く前髪の間隙から覗く、漆を溶かし込んだかのように真っ黒な二つの瞳に釘付けになった。

酷く冷たい目をした少年だった。

まるで目に映る全てが、自分を傷つけるとでも思っているかのような……。

「ママが……迷子なの」

私は誰かに口にすることで母がすぐにでも駆け寄ってくる気がして、見ず知らずの少年の両目を見つめたまま、そう言った。

「そう」

「あ……」

少年はそれだけ言うと、また泣き出しそうになる私になど何の興味もないかのようにきょろきょろと左右を見回し、不意にどこかへと走って行ってしまった。

声を掛けてくれた少年が人混みに紛れて見えなくなると、今度こそ私はどうしたらいいか分からなくなって、誰もいなくなった風鈴屋の前でわんわん泣き出した。

もう駄目だ。私は一生ママには会えないんだ。そう思うと悲しくて悲しくて、次から次へと涙が滝のように溢れてきて止まらなかった。

「ほら」

突然。

そう、それは突然だった。

目一杯に開けて泣き顔で母の名前を呼んでいた私の口に、甘いふわふわした何かが急に押し込まれた。それがわたあめという名の、ざらめを溶かして綿状にした菓子だと知るのは、次の年のお祭りまで。

「食べなよ。甘くておいしいから」

「……ありがと」

口の中に今まで味わったことのない甘い砂糖菓子を頬張りながら、母にしつかりと躡けられていた私はお礼を言うと、少年は相変わらずの冷たい目のままにこくと頷いた。

見れば見るほど華奢で希薄な少年だった。まるですりガラスの向こうにいるみたいに、存在感がぼんやりしていて、ガラス戸を開けたらそこには誰も居ないんじゃないかと不安になるような、そんな雰囲気漂わせていた。

歳は私よりも下じゃないかと思った。身長は伸び盛りの私より小さかった。白い手足は細く、幼かったとはいえ女の私と比べても大差はなかったし、顔はぼさぼさの前髪が半分くらい隠していたけれど、その奥のすっきりと整った顔つきまでは隠しきれていなかった。

幼い私に女性としての自覚があったのなら、男の癖に自分より綺麗な少年に妬いていただろう。

しかしそこは小学校にも上がっていない六歳の頃の私。頬が落ちるほど甘いわたあめをくれたこの少年を素直にいい人だと位置づけ、知らない人に……云々の教訓など、頭の片隅にも残っていなかった。

なにより私は、自分の所に少年が戻ってきてくれたことがとても嬉しかったのだ。

「行こう」

昔は大食だった私があつという間にわたあめを平らげるのを見計らって、少年が手を取って促す。どこに？ と私が尋ねる前に少年は言った。

「お母さんを探しに」

「！」

その一言はわたあめの甘さより、幼い私の体中に染み渡った。

「ママみつかるー？」

「見つける」

自分より背の低い少年の言葉には不思議と自信が溢れ、手を引かれて歩き出した私にも、一足ごとにその不思議な安心感が流れ込んでくるようだった。

私の手を引く甚平姿の少年は、障子紙のように破れそうな裸足で固い石畳を踏みしめ、人混みのトンネルの中をすすると縫うように歩く。

「あし、いたくないの？」

私は手を繋いだ少年にそう聞いた。

「平気。慣れてるから」

こともなげに言った少年は、ぞっとするような微笑で、少しだけ私の手を握る力を強めるのだった。

射的、輪投げ、たこ焼きに焼きそばにチョコバナナ……数ある屋台の前を素通りした少年が向かった先は、なんと神社の軒下だった。そこで行われる神事の催し物は、町中を練り歩いている少年少女の囃子手たちが帰ってこないが始まらない。辺りは既に薄暗くなっており、私の心には再び不安の種が芽を出そうとしていた。

賽銭箱の前に腰を下ろすように言った少年は、ひょいと私の手からふわふわのなくなった割箸を取り上げ、軽快に拝殿前の広場の真ん中へと駆けていった。そこでぐるりと方向転換すると、私の方を見て「さあさお立会い」と、幼い姿に似合わぬ台詞で呼びかけた。

大きな声ではなかったが、不思議と私の耳にははっきりと聞こえ、何をするの？ と私が尋ね

る間もなく、少年はその割箸を天高く放り投げた。

「おまつりどろぼうだーっ！」

縁日に来ていた小さい子が一齐に叫んだ。

同時に、凄まじい大粒の雨が屋台を、神社を、お祭りに来ていた人々をばらばらと叩き始める。

「おまつりどろぼうー！」

「どろぼうさんきたー！」

大人達は大急ぎで手短な屋台の幌の下に逃げ込み、子供達は親の言うことなどどこ吹く風で、ざんざん降りの夕立の中ではしゃいでいる。

この町では、夏祭りの当日に夕立が降ることを「お祭り泥棒に盗まれる」という。

年に一度の晴れ舞台を雨で台無しにされた舞い手の恨みつらみからこの名が付いたといわれているが、それがいつしか、『泥棒に盗まれたのだからもう一日やろう』、『せっかくだからめでたいことにしよう』などとなって、夕立が降ったら次の日ももう一日お祭りをする……というような決まりになっていったらしい。

なので、明日もハレの日。ケの日常に戻るのが一日延びたということで、子供達からしてみれば、お祭り泥棒＝夏祭りの夕立は歓迎すべき雨なのだ。

だけど当時の私はまだ、そんなことは知らない。

子供達が何で土砂降りの中に楽しそうに飛び出していくのかは分からなかったが、彼らが雨にも負けない大声で叫んでいる言葉——この雨と結びつく言葉は、母から聞かされていた。

「おまつり……どろぼう？」

思わず賽銭箱の前に立ち上がった私の視線は、広場で一人空を見上げて雨に打たれる黒い瞳の少年に注がれていた。

おびたしい水滴の洗礼を受けた少年は、髪の毛から爪先までぐっしょりと濡れており、それでいてその表情はどこか満足げだった。

「あなた……どろぼうさんなの……？」

私も軒先から雨の中に一步踏み出すと、瞬く間に髪の毛も浴衣も草履も、水浴びでもしたようにぐっしょりと濡れてしまった。それでも、言いようのない不思議な熱にほだされた私にとっては、滝のように降り注ぐ雨が水枕のようにひんやり熱を和らげ、とても心地よかった。

雨の音に掻き消されてしまったのか、少年は私の問いには答えず、もう一度ずぶ濡れの私の手を取ると「行こう」と再び縁日の方に向かって歩いていった。

大人がみんな屋台の下で雨宿りをしながら夕立が過ぎるのを待っているの、黒々とした石畳を歩いているのは私達二人のような子供か、急いで帰ろうとする人だけだった。

がらんとした参道を、雨に打たれながら騒ぐでもなく、子供二人で歩いていれば人目を引きそうなものだが、不思議と大人達は手を繋いで母を探す私達には目もくれなかった。

雨粒が朱に染まった頬に当たって弾けるたびに、私は自分の口元が徐々に笑みを浮かべていくのが分かった。このままわたし、どろぼうさんに盗まれちゃうのかな？ と思うと、何か背中がくすぐったい気持ちになる。

(それもいいかも)

と、唐突に先を行く少年が歩みを止めた。あまりの雨に目も開けていられなかった私は、鼻を少年の頭とぶつけるはめになった。思わず涙が出たが、目元に手を当ててもどれが涙なのか分からなかった。

「……ねえ、」

どうしたの？ と続けて出かかった言葉は、白雨の音に紛れて消えた。

体をずらして何も言わずに振り返った少年の向こう側に、見慣れた女性が私の名を呼びながら屋台を巡っているのが見えたからだ。

脇目も振らず、草履が脱げるのも構わず、一目散に私は母の腕の中に飛び込んでいった。

「ママーっ！」

「茜！」

自分と同じように濡鼠だった母は、浴衣が汚れるのも構わずに地面に膝を付き、安堵で泣きじゃくる私の冷たい背中を「大丈夫、もう大丈夫」と優しく撫で続けてくれた。母の手が触れている所から、体中に優しい温かさが広がっていくようだった。

始まりと同じように唐突に晴れ間が顔を覗かせ、激しいにわか雨が止んでも、私と母はしばらく抱き会ったまま、再開を喜んだ。

「よかったな、お嬢ちゃん」

涙も流し尽くしてふと見れば、そこはあの風鈴屋の前だった。店のおじさんが笑顔で私の頭を撫でてくれる。

「母ちゃん心配してたぞ？ ほら、せっかくあげた風鈴も置きっぱなしで、どこ行ってたんだ？」

そう言って、水滴のついた金魚の柄の風鈴をもう一度手渡してくれる。

そこでまだ名前すら聞いていなかったあの少年のことを思い出した。

「あのこは一？」

そう聞くと母は、葉の隙間から差し込む木漏れ日のように優しい笑みを浮かべて首を傾げた。

「あの子って？」

「あのね、あのね。わたしにふわふわくれてね、わたしのことママにあわせてくれたの！」

そうだ！ お礼にこの綺麗な風鈴をあげよう！ もしかしたら、友達になれるかもしれない！ ……そう思って後ろを振り返った私が見たのは、人波が戻ってきた夕暮れの縁日の喧騒だけ。夕立と一緒に次の町へ行ってしまったかのように、あの冷たい目をした少年の姿はどこにもなかった。

代わりに威勢のいい掛け声と共に、町中を廻っていた山車と、引き手囃子手の小学生、中学生が帰ってきた。空に祭りの本番を報せる小さな花火が上がる。

ふと足元を見れば、走り出した時に脱げた私の草履がきちんと並べて置いてあった。まるで『またおいで』と言っているようだ。

これがあの少年からのメッセージなのだと思うと、私はたまらなく嬉しくなった。

あの少年がどこかで、むすっとした無表情のままこちらを見ているような気がして、いてもたってもいられず、私は急いで草履に両足を通すと、風鈴を持った手も持っていない手も両方口元に

当てて、人混みに向かって目一杯に叫んだ。

「わたし！ ちゃんとくるからねっ！」

何事かと驚いてこちらを見る顔、興味本位で覗きこむ顔、慈しみの視線を送ってくる顔。顔、顔、顔。そんな沢山の顔の隙間から、高々と振り上げた少年の手が見えた気がして、私も頭の上に掲げた手をちぎれんばかりに振る。

「ぜったいぜったい！ ぜーったいくるから！ あしたも！ あさっても！ ずーっと！ だから——」

風鈴の涼しげな音色が、明日も続く夏祭りに、雨粒のように透明な彩を添えていた。

少年がふっと笑った気がした。

「やくそく！」

「……ま」

「……ママ」

「……ねえ、ママってば！ おきて！」

「……ふえ？ あ？ な、何何？ 楓」

「もう！ ぼさぼさあたまのどろぼうさんは？ リンリンは？ ママはおばあちゃんにあえたの？ なんでママは——」

ふと気が付くとあれだけ降っていた夕立はすっかり上がっていて、黄金色の見事な絨毯を空に敷き終えた所だった。昔語りをしていたら、いつの間にかまた眠ってしまっていたらしい。

(あっちじゃ最近なかなか寝つけなかったのに……)

これも実家の魔力だろうか？ 降り出した頃から時間はほとんど経っていないようだが、あっという間に過ぎ去った雨音の後に残されたのは、どうやら膨れっ面で私を質問攻めにする愛娘^楓だけのようだ。

「ただいまー」

さて、どこから話し直そうかと考えていた私の耳に、玄関の引き戸を開けるガラガラという音と、噂の喧嘩相手の声が聞こえてきた。

「パパだーっ！」

何かお土産の匂いでも嗅ぎつけたのか、楓はすぐさま飛び上がると、途中で一回曲がって玄関まで続く板張りの廊下を、韋駄天さながらの猛烈なダッシュで走っていく。

「おかえりなさい！ ……わ！ パパびしょびしょだー」

「うん。ただいま。……急に振り出すんだもんなあ」

「それはね、ドロボウさんにあったからだよ？」

「どろぼう？」

そんな声が遠くから聞こえ、きよとんとした旦那の顔が想像できて、思わず吹き出してしまふ。

「みてママ！ パパからもらったー！」

どたどたと、両親の声も聞こえる玄関からとんぼ返りしてきた娘が、本日の戦利品を自慢げに掲げる。見ればそれは、白地に真っ赤な金魚が映える子供用の浴衣だった。

「お、浴衣じゃない！ よかったねー楓」

「うん」

「あっちでおばあちゃんに着せてもらいな」

「うん！」

満面の笑みで大きく頷いて、座敷の方に向かってパタパタと走り出した娘は、何を思ったのか急ブレーキで立ち止まって、くるりと私の方を振り返った。

「ママ、パパのこと好き？」

「好き」

あれだけの口論をしたにも関わらず、嘘偽りない言葉が考える間もなくすんなりと口を出た。

「じゃあちよっとだけママに貸してあげる！」

そう言って楓は駆け戻って来ると、後ろに回り込んで、その小さな手のひらで私の背中を「ほらほら」と押す。

苦笑いしか浮かばない。このお節介なまでに他人を気遣う性格、一体どこの誰に似たんだか。

立ち上がり、楓に玄関先まで背中を押されていくと、水浸しで土間に立っている童顔の主人（羨ましい）と目が合った。楓はすぐさま踵を返して、「おばあちゃーん！」と呼びながら走り去っていく。雨の匂いを纏った空気が、口を開いた私の喉をしっとりと濡らした。

「お帰り。泥棒さん。随分派手に濡れたみたいね？」

「楓といい茜さんといい……何ですかいきなり？」

「ふふふ、何でもないわよ」

こんなことなら折り畳みじゃなく普通の傘を持って行くんだった、と愚痴と水滴をこぼす旦那にバスタオルを持ってきてやり、代わりに、両親は目の前で相々傘するくらいにはまだまだ若い、と娘に言われても反応に困るような報告を受けた。どうやら旦那は律儀にも、自分の傘を両親に貸したらしい。

「コンビニでビニール傘でも買ったらよかったのに」

「あれば買ってますよ」

「あー……それもそうか」

この場合、あればというのは傘ではなくコンビニの方。実家から最近出来たと聞いたコンビニまでは、車で十五分は掛かるのだ。

「それにしても帰るなり人を泥棒呼ばわりするなんて……ああ。もしかして」

「そ。夕立見てたら思い出しちゃって」

玄関から差し込む金色の光は、私の名前の色に変わりつつあるようだ。二人で通り雨の去った真夏の空を見上げる。湧き立つ入道雲は、都会で見るものよりも一段と大きく見えた。

「……懐かしいですね。茜さんもまだこんなにちっちゃくて」

「そんなにちっちゃくはなかったでしょう？」

さすがに楓の半分は言いすぎだ。呆れる私を見て、未だに敬語で話す旦那は屈託なく笑う。

「はは。でも、わたあめは美味しそうに頬張っていたじゃないですか」

「それは……そうね、そうかもしれないわね」

「？ 今日はやけに素直ですね……うわ！ 本当のことじゃないですか！」

怪訝そうな顔をした旦那の髪を、バスタオルでぐしゃぐしゃにしてやる。後ろをヘアゴムで束ねた、今でも缺を入れるのが怖いらしい長い髪の毛は絹の糸の束のようで、これで何の手入れもしていないのだから、シャンプーに、トリートメントに、アフターケアにと色々気を配っている私に対する嫌味としか思えない。

付き合ったばかりの頃のような、見ている方が恥ずかしくなるようなスキンシップもそこそこに、髪の毛から水も滴らなくなったタイミングを見計らって、私は旦那の深い海の底のような目を見据えて言った。

「……ねえ」

「はい？」

「久々にお祭り……いこっか」

「はい！」

楓が生まれた頃から、旦那は昔に比べてよく笑うようになった。以前から笑う時は笑う人ではあったが、心から笑っていると感じるようになったのは、ここ数年のことかもしれない。

もう長い付き合いなのだ、そのくらいの機微は分かるつもりだ。

どう見てもまだ二十代にしか見えない（妬ましい）旦那は、小学生のように打てば響く返事をするなり、濡れた買い物袋の中から楓の持っていたものと似た、ビニールに包くるまれたお歳暮のような箱を取り出して、いつかのプロポーズの時のように私に手渡す。

「そう言うだろうと思って、茜さんの分も買ってきました。……僕と仲直りして下さい」

「ふふ、何それ」

その芝居がかった台詞の可笑しさに小さく吹き出しながら、私は箱を受け取って蓋を開ける。

「わ……」

それは紺の生地に白と薄い水色で菖蒲の花と流れる水をあしらった、飾り過ぎないけれど、素朴で繊細な意匠に、和を感じる夏らしい着物。前に私がカタログを見ていて、思わず『素敵……』とこぼした、地元の職人さん手縫いの浴衣だった。

「覚えててくれたんだ……」

「当然でしょう？」

「……ありがと」

さも当たり前のようにそう言う旦那に、私は背中がくすぐったくなり、自然と頬が緩むのを必死で押さえる。背後から野次馬よろしく母と楓の視線を感じるのだ。あの親にしてこの私あり……なら孫も一緒でも不思議じゃない。

旦那も気付いたのか「楓とお義母さん、見ていますね」と小声で囁く。

もうそこまで若くもないのだ。あまりのろけてばかりもいられないなと思いつつ、小さく頷くと私も笑って旦那の顔を見上げる。

「あと茜さん、こっちにいる間は喧嘩禁止にしませんか？」

「……うん。じゃあ——」

「約束。しましょう」

相変わらず言葉を盗むのが上手い。先んじてそう言われてしまった私は、二の句が継げずに旦那の顔を見返す。その顔はしてやったりと、いたずらっ子のように笑っていた。

私はこの顔に、弱い。

「……泥棒」

私はささやかな幸せに緩む目元を隠すように、とっくに自分の背丈を追い抜いた、ずぶ濡れの旦那の胸に思いっきり飛び込んだ。シャツ越しに早い鼓動を感じる方とは反対側の耳には、孫と一緒に歳甲斐もなくきゃーきゃー騒ぐ野次馬と一緒に、町中を一周して帰って来たお囃子の声が聞こえてくる。

いつかと同じ風鈴の音色が、雨の上がった私色の空に吸い込まれていく。

今日は、夏祭りだ。

